

2017年5月28日（日）国立国会図書館 OBOG19 名飯館村見学感想



1. 小林英治

昨日の飯館村訪問は、メディアでは十分に伝わってこない村の現状と問題点及びその背景などが私なりに理解でき、たいへん有益でした。案内をしてくださった管野宗夫さん、田尾陽一さんに深く感謝いたします。特にお二人の経験に加え、学術的知識に裏打ちされた解説がたいへん役に立ちました。

事務所では宗夫さんのビデオにより、詳しい経過・現状などが理解できました。皆に分かる記録を残すことがいかに重要か理解できました。

線量計で数値を実測したこと、村内を回ったこと、そこで村人の皆さんに直にお話を伺ったことが、私のからだ全体に染みつきました。佐須、比曾、長泥地区入口、村役場などそれぞれの場所と会った人たちのことが脳裏に焼きつきました。

帰村か、非帰村かの選択が、村民各自に重くのしかかっていることを強く印象付けられました。帰村している人々の想いと決意、村外で思いを寄せる人たち、みなそれぞれ事情がありながら、村の将来に深い思いを寄せているのだと確信しました。

これからの村をどうするか、どうなるのか。私の友人の社会学者大野晃先生は「限界集落」ということばを言い出しました。

これはこれからのわが国にとって大きな問題でしょう。

若い人たちの知恵と工夫、努力に期待するよりほかありません。

飯館では大学生たちが村に来て田植をしたり、田に植える作物の研究をしているの
ことを伺いました。彼らの将来に期待するとともに、彼らをどのようにして村に居つか
せるか、生活の手段を作り出せるか、村の人とどう一体となるかの問題だと思います。
これを行政、民間、NGO、大学などが一致協力して知恵を出し合うことではないで
しょうか。

想いもよらなかった放射能汚染という人災に見舞われた村の人たちに深い同情の念を
表すとともに、今回その実情の一端に触れられたことを深く感謝いたします。

皆様の更なるご健闘、ご健康を祈ります。

ついでながら私がアジア開発銀行（ADB）について書いた意見が、偶然にも今日の
Japan Times 紙に載りました（9面のオピニオン欄）。私はささやかながら日本の
ことを外国に知らせる努力をしております。そこで次にこの放射線汚染のこと、
飯館村のことを是非書きたいと思います。その節は皆様にいろいろお聞きする
かもしれません。どうかよろしくお願いたします。

有難うございました。

2. 小池令子

飯館村のみなさま、ふくしま再生の会のみなさま

先日はご多忙の中、私共に丁寧なご説明をいただきましてありがとうございます。

菅野さんや田尾先生の、何とか村を復興させたいとの熱意がヒシヒシと伝わって
きました。

「百聞は一見に如かず」を痛感した一日でした。

まず、美しい野山や建物が目に入り、目に見えない放射能がどんなに村民の
みなさまを苦しめているのだらうと思いました。

次に、その美しさにおよそ似合わない、夥しい数の汚染土フレコンバックが
大切な田畑を占拠しているのに驚きました。

これは本当に「仮」置き場で済むのでしょうか？

また、太陽光パネルの多さも異常に見えました。

ご説明を伺い、その除染のやり方が村の再生を妨げるかもしれないことも、
初めて知りました。

ただ除染をするだけでなく、将来を見据えた有意義な方法に知恵を働かさねば
いけないのに、最前線でご苦勞されているみなさまの足を引っ張っているのは
中央にいらっしゃる方らしいということもわかりました。

今まで知らなかったことを恥ずかしくも思っています。

それにしても、説明して下さったすべての方が、とても穏やかで冷静な
ことに感動しました。

これまでの想像もできない悲しみ、辛さ、怒り、絶望を飲み込んで再生に
立ち向かっていらっしゃるのですね。

私にもできることを考えました。

- ・この体験を周りの人に伝えること
- ・飯舘村のみなさまがどうしていらっしゃるか、これからも考える。
- ・福島の産物を買う。

あまり役に立ちませんが、みなさまのご努力が早く報われますようお願いしております。

3. 齋藤友紀子

菅野宗夫さん、田尾陽一さん、お忙しい中、私達のために貴重な時間を割いてくださってありがとうございました。

福島に帰る途中で、田植えを終え水をたたえた田圃と人の気配のする家々が目に入り、飯舘村が原発事故で失ったものの大きさが改めて胸に迫りました。

大量のフレコンバッグの放置、踏み固められた田畑、人気のない道路や住居。突然降ってわいた放射能汚染により、長年かけて培い育ててきたものを失わざるを得なかった理不尽さ、無念さが、今回の訪問により実感として理解できました。

また、お二人の明るく前向きなお人柄と「ふくしま再生の会」の地に足を付けた活動に勇気づけられました。高木さんが何故飯舘村に通われるのか分かる気がします。

私も自分にいる場で何ができるのかを考えてみたいと思います。

4. 山岸邦子

日本の原風景が広がる飯舘村の里山は新緑に包まれていました。

本来なら人々の営みがあり、田植えが終わり水が張られた田には稲の苗が育ち始めているはずなのに・・・

メインの田はフレコンバックの山に変わっていました。悲しいです。

福井生まれのせいか原発にはずーっと言い知れぬ恐れを抱いていました。

原発がある限り原発事故・災害とは背中合わせなのだという事実を目の当たりにした 1 日でした。

その中で村の再生のためにあらゆる角度から模索を続けている菅野さん、田尾さんや支援者、帰村の準備をされている方々に直接お会いしお話を聞くことができました。

心から感謝しています。

人間が作った原発です。事故後の再生も編み出せるような気がしてきました。

私ができる再生のための支援とはなにか、真剣に考えたいと思っています。

再稼働認可を次々と出す政権は何を思っているのでしょうか？

私には怒りしかありません。

5. 千代正明 (ちよ まさあき)

飯舘村訪問 (2017.5.28) 駄句 (まさあき作)

- ・ 目には青葉山時鳥初飯館（時鳥を久しぶりに聞いた人あり）
- ・ 原発の人災だけに割り切れず（理不尽さ、無念さ消えず）
- ・ ファーストネーム飛び交う村や皆菅野
- ・ 写真見てようやく知る「美しい村」（日本で最も美しい村連合）
- ・ 前をしか見ない田尾さん宗夫さん
- ・ 言い立て（飯館）るしかない科学的データ（モニタリング、放射能分析）
- ・ 測定器だけが見えてるシーベルト
- ・ 畦道を除く除染の能天気
- ・ 良田はパネル・バッグの見本市（太陽光パネルとフレコンバッグ）
- ・ フレコンバッグ何故か田んぼの一等地
- ・ 仮仮が仮へ行く日があるのかな（バッグ置き場、見通し無し）
- ・ テニスならいつでもやれる田んぼ在り（機器が踏みしめ、カチカチの田んぼ）
- ・ だれだれが住んでた家の多きこと（邸宅に帰れない悲しさ、くやしき）
- ・ 放射能知らずか野生動物園（猿に遭遇）
- ・ 紹介のパワーポイント虹かかる（虹の架け橋、オーバーザレインボウ）
- ・ 長泥のゲートも空気仕切れない
- ・ 例祭の賑わいを知る駐車場（山津見神社、芸大生の模写天井画あり）
- ・ 政官に期待毎回裏切られ（政官に知恵の無いもどかしき）
- ・ 無知からの施策が帰村遠くする
- ・ 札東に頬叩かれて選択肢（金の力のものすごき）
- ・ 避難指示解除新たな総力戦

- ・戻る人戻れぬ人も皆仲間（分断を乗り越える力）
- ・若人のトライ未来へ虹をかけ（若い研究者の産業化への試み）
- ・テント張り人工授精牛固定（近々牛が牧草地に放されるそうなの）
- ・共感と協働のもと再生へ（「ふくしま再生の会」へ結集）
- ・闘志秘し「までい」の力村の衆（お人柄、見習いたいものです）
- ・自問する何ができるか帰り道

6. 枝松栄

今回の飯館村見学を企画して下さった高木さんに先ず感謝します。実際に現地を訪問して得たものは想像以上に大きかったです。

菅野宗夫さんと田尾さんから詳しい説明を聞きながら、「日本で最も美しい村連合」に加盟していたという飯館村の現実をつくづく実感しました。

この季節は菅野さんの家の周りをはじめ村中の田圃は早苗で美しい景色だったでしょうに、荒れた砂地、雑草地、最悪のフレコンバッグの山に変わり果てていました。それに住民の居ない里・・・。

原発事故のすぐ後で再生の会を起し活動を始められた皆さまのご努力に驚きました。メディアにあまりのらないので乏しい知識しか持ち得ませんでしたが、これからは今回飯館で見聞した事実を多くの人に広め、再生のためにひとりひとりが何ができるかを考えたいと思います。

7. 牛越弘美

28日は目一杯飯館村を案内していただき、ありがとうございました。

ふくしま再生の会について、高木さんから時々話は聞いていましたが、いまいちだったのが、よく理解できました。以下感想です。

山手線内の3倍の広さ、6000人の住民、20の地域、標高400Mの高原地帯という枠組み紹介で飯館村にずっと入れました。バスで走り回っての実情案内（テニスコート、フレコンバック置き場など）に国の政策がどちらを向いているかがはっきりわかりました。その中で、再生の会の活動（放射能測定、農作物、山津見神社の天井絵の再建、帰村者との連携など）は田尾さんのバス運転手への道案内でも一端を垣間見られました。

4月の帰村者300人、今年中の帰村者600人、村の存続が問われているとのこと。それぞれが決めたこと、再生の会は再生の会、とそれぞれを認めていることに、意見が違うと地域が分断されるということを見聞きしていたので、再生の会のふところを大きさを感じます。

家を再建し、新しい農業にチャレンジしている宗男さんとお父様のお元気に脱帽です。事故当時、私だったら立ち直れないなあ、とテレビを見ながら思っていたことを思い出してしまいました。

私は図書館を退職してから、住んでいる多摩ニュータウンの団地の商店街の中の自然食品店で働いています。自閉症などの障害者と一緒に働く福祉事業所なのですが、ここでは年に2回、関係する団体などに声を掛けて市を開いています。2011年夏から福島支援で会津の団体も参加して福島の物産を販売しているのですが、福島への関心は段々薄れてきている気がします。今回の衝撃的な見聞を活かしていきたいと思います。

8. 土屋紀義

飯館村の皆さま

28日は、おかげさまで、極めて有意義な一日となりました。貴重な時間を割き、ねんごろな説明をしていただき、本当にありがとうございました。車で、飯館村を通り一遍通り過ぎただけならば、事態の深刻さなど一向にわからず、新緑の綺麗な村というほどの感想しか得られなかったと思います。

全村ではないものの帰村が可能になったわけですが、ようやく復興への第一歩を踏み出したというところでしょうか。とりわけ村の生活に重要な役割を果たすであろう山林への立ち入りが殆ど不可能であることが強く印象に残っています。以下、印象に残った幾つかのことを順不同で書き連ねます。

畦が国による除染の対象となっていないこと。これはどう考えても理解できません。畦も耕地の一環であるはずですが。農作業の際に必ず通らなくてはならない箇所であるばかりでなく、枝豆などを植えて、農地其のものとして用いられている地方も多くあります。汚染土の残置場所についての屁理屈と同様に、現実を無視した、お上の都合優先、原発事故の処理をめぐるっては、他にも似たような理不尽なことが数多くあるのではないのでしょうか。

汚染土といえば、其の残置場所の地代の処理についての方策には感心しました。沖縄の米軍基地の使用代と類似の問題性を伴う事案ですが、コミュニティにも還元するという考は、実に名案です。原発事故被害の補償金でパチンコをする人が一部の批判を受けているようですが、やりたくても仕事のない人が、めったに手にすることのできないような小金をもてば、よほどの聖人君子でなければ、そうなるのも当然かと思います。札びらでひとの頬をたたけば、必然的な結果でしょう。結論に至るには大変なことだったでしょうが、後世に至るまで大きな影響を与えることになるのではないのでしょうか。

まだまだ課題山積という状況ではあるようですが、例えば、菅野さんや田尾さんのような中核的な存在の意義はきわめて重要だとも思いました。雪だるまも、最初は小さな核が必要です。此の核から始まって巨大なものともなりうるわけですから、飯館村の今後もある程度見通せるような気もしました。

なお、飯館村の経験が、飯館村だけのものではなく普遍的な意義を持つという当事者の

方々の考え方も印象に残りました。

以上思い浮かんだ感想をとりとめなく書き連ねました。妄言多謝。

9. 村山久枝

高木さま、このようなツアーを計画してくださってありがとうございました。

そうでなければ、きっと自分の眼でみることはなかったと思います。

菅野宗夫さま、田尾陽一さま、貴重なお時間を私たちのために割いていただきまして、本当にありがとうございました。お陰様でいろいろな面から飯館村を見ることができました。まず最初に、黒い袋に詰められ、ぎっしりと置かれたフレコンバックをみてショックでした。黒いバックの土が土の墓標に思えました。

その中で、飯館に戻って懸命に生きて行こうとする人たちに未来への光のようなものを感じました。

けれども戻りたいと思っても戻れない人たちが、戻った人たちの応援団になれたら、どんなにすばらしいだろうと思いました。一番強力な応援団ではないでしょうか。

多分戻れない人たちが、戻った人たちのご苦労が一番分かるような気がします。

忘れっぽい私ですが、見てきたことは忘れないようにしようと思います。

そして関心を持ち続けようと思います。

本当にありがとうございました。

10. 松鶴光子

菅野宗夫さま

田尾陽一さま

この度は、飯館村見学にお骨折りいただき、本当にありがとうございました。

高木さんには、左足の不調を引きずりながらのご案内感謝です。

皆様の感じられたことと、まさに同感です。

6年の長きにわたり、忍耐強く、飯館村の支援を続けてこられた「ふくしま再生の会」の皆様のご努力には尊敬の念しかありません。でも、これからが正念場だと思います。人口6,000人余のところ、今は600人の帰村者ということは、1割ですね。それも、若い人の帰村は困難。頂いたパンフにありましたように「再生の道は険しく」ですよ。それでも、田尾さんや菅野さんのあの前向きな明るさはどこから来るのでしょうか。（6年の歳月を要して獲得されたものでしょうか？）

帰還困難区域の長泥のゲートの前に立った時、からっぽになった牛舎の前を通った時、明らかに線量計の数値が変わるのを見た時、塀に囲われた中のフレコンバックの異様な多さを目にした時、等々様々な想いが駆け巡りました。

皆さんの感想にもありますように、原発の爆発により思いもかけぬ事態に追い込まれた村民の方々のお気持ちを察すると、不条理の何物でもありません。

でも、そこから立ち上がろうとする宗夫さんのような村民がいて、それを支援しようという田尾さんはじめ「ふくしま再生の会」の皆様がいるということは、何て素晴らしいことだろうと思いました。

若者を含む帰村者の数が増え、一日も早く「日本で最も美しい村連合」の一つである飯館村が甦ることを、あの素敵な町役場やそのほかの充実した施設などが活気を取り戻す日の早からんことをお祈りしております。

11. 熊田淳美

高木さん、菅野さん、田尾さん

恥ずかしながら震災後初めての東北。飯館村を訪問させてもらう機会を作ってくれた高木さんに、まずお礼申し上げます。

宗夫さん、田尾さんには、分かり易く丁寧なご案内と解説を頂き、大変有意義でした。

山の木々の新緑に包まれながら、その下はシートに覆われた無数のフレコンバッグ、雑草や溜まり水に覆われた田圃の面々、人影を見ない家々など、いずれもが惨めに映りました。そんな状況の下で、新たな再生のために奮闘されている宗夫さんや田尾さんたちのご苦労と情熱にいたく感動させられました。その活動を手伝われている高木さんにも、頭が下がります。

今後とも、飯館の再生には数々の困難が伴いましょう。国や村の行政への提案やら折衝などますます必要でありましょう。その際、田尾さんが強調されていたように、「現場の事実」を相手に示すことに優る武器はないでしょう。そうした経験や実績を積み重ねられることが大事と思われまます。と同時に、行政側には、住民の気持ちに沿う柔軟さと謙虚さこそ求められるのだと痛感しました。

例えば、公民館に集ってこられた村の人々のおおらかさ、とりわけ、宗夫さんのお父上の素晴らしい笑顔は、これからの村の再生の前途を予兆されているように思えました。

兎に角、とても良い旅行でした。有難うございました。これからの皆さんのご奮闘をお祈りいたします。

12. H. I

私は愚図なので、うろうろしていたら感想文提出も遅れてしまい、みなが私の感想も言ってしまったので、何を書いてもいいかわかりません。ともかく、緑の山や、元の水田の一番いい場所にいつまで持つのかわからない処理されたという汚染土フレコンバックが並んでいたことと、あぜ道は農作物は作らないから除染しないという意地悪と、みんな戻ってこれない政策をしながら立派な道の駅(?) だっけにお金をかけるなんて、本当に本当に、、、、

5月22日の朝日歌壇に

東北のこっちの方から兵士らと米と娘と電気送りし 南相馬市 斎藤杏

というのがあり、東北が関東の大都市へ兵士や食糧や労働力や電気などを供給していた歴

史を述べ、彼の大臣の東北侮蔑発言に一矢報いている。

私も、父と母は福島県白河の出身です。飯舘とは少し離れていますが、今後も何か応援したいと思います。

13. 渡辺 善次郎

ある程度想像はしていましたがあれほどの惨状とは思っていませんでした。

優良農地を埋め尽くすフレコンバッグの山々、しかも耐用年数切れ間近な。

村の再生には営農が不可欠ですがあのままでは困難です。人々が戻れなければコミュニティは回復できないでしょう。

原発事故は一瞬にして人々の生活基盤を奪い、生存条件を脅かし、コミュニティを破壊します。それでも各地で原発再稼働が始まっています。

これは日本の政治や社会のあり方の問題です。被災地では人々の知恵が十分に活用されず、見てくれ優先の再興政策がまかり通っています。私たち二人、このようなことを話し合っではますます怒りの度を高めています。

ただ宗夫さんや村の人々、また田尾さんはじめ再生の会の皆さんの明るさが救いでした。阿武隈川の橋にかかった大きな虹の画像が忘れられません。

写真の整理ができれば地元の畑講座で現状報告をしようと思っています。

14. 渡辺淑

放射能について全く無知な私はこれまでいくつかの疑問を持っていました。

「原発事故による汚染について語られる時、ほとんどが半減期の短いセシウム。

プルトニウムなどその他のより恐ろしい放射能物質はどうなのだろう」「それらは土の上に降り注いだ後地下に入り込んで地下水に溶けてしまうのではないか。そして水脈を通ってあちこちへ流れていくのではないか」「フレコンバッグが野ざらしにされているけれども中間所蔵施設はおろか仮置き場の用地確保さえもままならない現在、写真で見るあの仮・仮置き場は一体いつまで蟠踞し続けるのだろうか」等々。

これらの疑問は最後の一つを除いて田尾さんの説明で答が出ました。

「今回の放射能汚染はセシウムが主である。セシウムはその性質として土に噛みつく形でくっつき、離れない。従って土を動かさない限りセシウムが移動することはない。又、水にも溶けないので野菜に吸収されることもない。」とのことで、私が密かに抱いていた「村の人や支援の人々がどんなにがんばってもそれは”心のあり方”だけで、農村としての再生は無理なのではないだろうか」という心配はなくなり、「再生の日は待つことができる」という希望が湧いてきたように思いました。

ただ、耐用年数わずか3年という230万個ものあのフレコンバッグはどうなるのでしょうか。こればかりは宗夫さんや田尾さんたち再生の会の人たちの努力では如何ともし難いことです。田や畑そして牧場が広がる山あいのあの美しい田園風景が戻る日は来るのでしょ

うか。

私は今回ご案内下さった宗夫さん・田尾さんお二人の人柄にも深い感銘を受けました。村は放射能の問題に加え、更に深刻な問題に直面しています。事故によってもたらされた家族や地域の分断です。心身ともに消耗するこの問題にお二人は強い信念と意志で、しかし特に気負うこともなく淡々と対処していられます。そして田尾さんは飯館村の住民票まで取ってしまい、今や宗夫さんの隣人です。その宗夫さんが再生の会の歩みを一篇の画像に綴ったのを拝見しました。

その最初と最後の画像は阿武隈川の真上にかかる虹です。虹の架け橋が場所・時・テーマそれぞれこんなに象徴的に現れるとは！ 思わず感嘆の声を上げてしまいました。

善次郎同様私も友人・知人、つてを辿っているいろいろな人にこの虹のかけらを届けていきたい、そしてその人たちも又そのかけらを更に又分けて行ってほしい、そう思っています。

15. 石倉賢一

飯館村の置かれた状況の厳しさを実感いたしました。

2015年8月に福島から南相馬までバスの窓から無人の住宅、野積みされたフレコンパックを目にはしましたがそれはあくまで景色として見たもので、それ以上のことは考えることはできませんでした。除染の対象から畔が除かれていること、また住宅から20mまでしか認められていないことなど生活者の目線からはほど遠いものであることを知りました。なにより原発汚染が地域の共同体はもとより家族の絆さえ壊していくことに恐怖さえ感じます。

お話しくだだった方はいずれも日夜先の見えない不安、焦燥感と戦っておられることと思いますが、感情を押し言葉を選んで丁寧に説明したくださったことにご感銘を受けました。

東京オリンピックに流されることなくこれからも飯館、福島に目を向けていこうと思います。

16. 石倉雅子

皆様に感謝いたします。

案内をして頂く間に「一人の子どもも見なかった」という現実、貸して頂いた線量計の数値と同じように、事実として私の胸の中で重い塊となっています。

宗男さんや田尾さん高木さん達再生の会の皆様にとって何を今更と思われるかもしれませんが。

私は、30数年我が家で家庭文庫をしながら、子どもと本を窓口に図書館を社会を見てきました。行きに止まってくださった学校に、図書室の文字が大きく見えた時に、専任の司書さんはいらっしやるのかな？楽しいおはなしの時間はあるのかな？等と子どもたちの読書環境を想像したのですが。

文庫の仲間、図書館を友とする仲間、周辺の人々に伝え飯舘へ誘いたいと思います。

17. 山口美代子

思えば、東北地震の被災地へと足を運んだのは、2年前（2015年11月）、「全国女性史研究の集い in 岩手」に参加したことでした。主催者は地震被災地の現状を知って欲しい、そして支援の意味を訴えて、開催地の遠野、釜石、宮古市へとバス移動の3日間でした。勿論集いで、福島原発の被災報告があり、「来て、見て、感じて、伝えてほしい」と訴えられました。

同じ東北、被災の原点は同じでも、原発の被災による地域での現状は、全く異なること、今回のバスツアーで、改めて深く認識させていただきました、現実に現地を訪れ、そして何よりも宗雄さん、田尾さんの明快な説明、長期にわたって向き合ってきた被災地の被害状況そして問題点など、理解することが出来ました。感謝とともに敬服です。ショックだったのは、放射能の影響による立ち入り禁止のバリケート、被災地の”今”の、ほんの一部分でも体に深く感じました。高木さんのおかげです。ありがとうございました。

18. 吉本恵子

28日は本当にありがとうございました。

夕方南相馬の実家に帰り、木曜日の夜に自宅に戻りました。

私と夫は、結婚当初から、5月の連休には私の実家で過ごすのが常でした。

5月のもてなし料理は、父が採ってきた山菜と山の畑でささやかに作っている野菜、釣りが趣味のいとこが釣った魚。父と猿や猪の攻防戦などを面白く聞きながら、ビールがすすみ、母の手料理があつという間になくなるので、父も母も誇らしげで嬉しそうに笑っている、そこには美味しく幸せな時間が流れていました。2010年5月までのことです。

今年、その同じ畑を花でいっぱいにすると、妹が、花の種を蒔き、苗を育て始めました。もう少し大きくなったら植えるつもりのようです。花が咲いたら種を取って増やそう、土地にあう植物を植えたら、きっとたくさんのお花が咲くようになるね、などと楽しく話しました。

父が丹精してきた山の畑と林は、私たち家族に美味しい野菜や果物を提供してくれるだけでなく、小鳥が鳴き、木立の間から風がとおる、5月には本当に清々しい場所でしたが、震災で立入禁止となった山林に隣接しており、父も野菜を作ることが難しくなったのです。

自然の力は圧倒的で、人の手が全く入らない周りの山林には随分と木々や植物が生い茂ってきました。実家の林も、父が折々に下草を刈ってはいますが、妹が、枝を切り落としながら、「秘密の花園」の入口ってこんな感じかな？と呟くような場所がありました。そうか、いつか、この畑と林全体が、人知れず花々の咲く「秘密の花園」になるのかもしれない、それも素敵、と思ったことです。

今回、佐須や比曾、長泥地区の入り口など村全体をご案内いただき、飯舘村の厳しい状

況がひしひしと伝わってきました。ですが、飯館村で 1 日過ごし、菅野さんや村民の皆さんの話をうかがっているうちに、なぜか、胸の中にポッと丸い明るい光が灯り、2011 年 3 月以来、私の心にわだかまってしまったものが溶けてきたような気がします。

東北は、長い歴史の中で多くの逆境を乗り越えてきた土地です。飯館村の皆さんと再生の会の皆さんが土地を耕して蒔いた種が豊かに実を結びますように、心から応援しています。